

# 小林宏治先生を憶う

工学院大学名誉教授 矢部 眞

平成8年11月30日に本学会名誉会員小林宏治先生が逝去(行年89)されてから、はや1年になろうとしている。NECを日本一の会社から世界有数の会社にまで育て上げられたことは、余りにも有名である。(昨年12月24日の社葬の時、関本葬儀委員長が「小林先生が売上げを50倍にのぼされた」と挨拶された。)

本学会会長を昭和44~46年度と53~54年度と再度勤められた。歴代会長で再任された方は先生だけである。しかも大変お世話になった。初めて就任された時のことは、筆者も関係したので記しておきたい。

土光敏夫先生を昭和42~43年度の会長に引っ張り出されたのは、大西定彦2代目会長。「ORなんて難しいのはわからん、無理だ」と固辞されるのを、「日立、三菱ときたから、次は東芝だ」と。

土光先生も良くやって戴いた。任期満了がせまって、次期会長をどなたにお願いするか幹事会で相談した時、「小林宏治先生では?」と提案したのは筆者である。たまたま、その少し前に先生の『コンピュータ時代への挑戦』という本を読んだからである。感心した個所はいくつもあったが、「安定な企業は不安定、不安定な企業は安定」という言葉にはびっくりした。当時、筆者は国鉄職員で、「安定な企業とは国鉄のことか」と思ったからだ。その後、他の団体の勉強会仲間で電電公社の研究所からNECへ入られた方にこの話をしたところ、「それはちがいます。電電公社のことですよ」とのことだった。その頃には、先生には然るべき役員から会長就任をお願いして戴き、内定となっていたので、「実はOR学会の次期会長が小林先生に内定しました」とその人に言うと、「それは無理でしょう。小林さんはORなんか判りっこないですよ。むつかしいもの」と、土光先生と同じ言葉が出て来てびっくりした。

さて、第1回の理事会で小林先生は、「皆さん、何をご希望ですか」と聞かれた。そこで筆者は「学会を法人化して戴きたい」と申し上げた。

学会の財産は人である。そこで国鉄では、あるテーマについて学会に研究委託をして成果を得た。その後

勉強仲間の防衛庁の方から、官庁では法人でないと研究委託が許可されないとのこと。そこで法人化の実現を小林先生にお願いしたわけである。

話は変わるが、学会の創設者のご苦勞は大変だったらしい。ともかく昭和32年に学会が発足、2年間は日科技連のお世話になった。そして34年に独立した。以後約10年になるが内部は火の車だった。大物の会長が何代も続いたけれど当初から事務所は好意で無料借用。何時までもこんな状態は続けられない。しかし、移転費用もない。そこで幹事で相談して会員から募金した。会長に就任されたばかりの小林先生にもお願いした。

法人化については、小林先生が住友系の社長会・白水会に提案され基金を作って戴けた。これには感激した。もともと真面目に運営されていたので、文部省関係にも問題はなく、短期間で実現できたという。これには多くの先生方のご協力があつたと聞いている。ただ、その後官庁からの委託研究があつたかどうか?

小林先生は会長の任期を1年延長して3年間勤められ、学会の基礎を固めて退任された。その後、いろいろの役職につかれた時“OR学会名誉会員”と記された。会員として有難く感謝していた。

さて、本誌1979年11月号に北川一栄先生の追悼文で記したが、小林先生が昭和53年度、北川先生のあとをついで再度会長に就任された。その挨拶で先生は開口一番「老人は引込め」といわれたので驚いた。隣の敬愛する先輩が首を亀のようにつくめられた。続けて「学校の先生は勉強せよ。研究資金は援助する」と。この時が先生にお目にかかった最後となった。

経営者にとって最も大切なのは、先見の明とバランス感覚である。先見の明については先生の場合には、国の内外をとわず良い知人を持っておられたからのようだ。前述の「安定な企業は……」は、P. ドラッカ一教授からとか…。また、コンピュータに力を入れたが、本業とのバランスを失うことはされなかった。先生の提唱されたZDもC&Cも立派なORと思う。ORマインド—科学的な考え方—をもたれた方であった。謹んでご冥福をお祈りする。合掌。